

自社開発特化型AI「KIBIT」で専門家の判断を支援

投資判断 (6/11)

FRONTEO (2158・東証グロース)

Overweight 継続

株価	投資単位	時価総額	年初来高値	年初来安値	PER(予)
642円 (6/11)	100株	252.7億円 (6/11)	688円 (25/2/20)	452円 (25/4/7)	41.1倍 (6/11)

リスクマネジメント事業を主軸にAI創薬など育成

■リカーリング収益の増加で収益性改善

25年3月期の連結業績は、売上高が6,099百万円（前期比17.3%減）にとどまった一方、営業損益が527百万円の黒字（前期は185百万円の赤字）、最終損益が555百万円の黒字（同2,843百万円の赤字）にそれぞれ転じた。AIソリューション事業において24年3月期に大型案件のライセンス買取りによる収益を一括計上した反動もあって減収となったが、前期に実施したコスト構造改革の効果や、**ビジネスインテリジェンス分野および経済安全保障分野におけるリカーリング収益の増加による収益性の改善により増益となった。**

26年3月期の連結業績は、売上高7,000百万円（前期比14.8%増）、営業利益700百万円（同32.7%増）、純利益615百万円（同10.8%増）と2ケタの増収増益を予想している。売上高は、オーガニックでの成長のほか、前期に米国のリーガルテックAI事業から撤退した影響を、ビジネスインテリジェンスや経済安全保障の成長と4月に子会社化を発表したアルネッツで補う。なお、当期より報告セグメントを変更。AI創薬やAI医療機器を手掛ける「ライフサイエンスAI事業」、ビジネスインテリジェンス・コンプライアンス支援、経済安全保障、リーガルテックAIを手掛ける「リスクマネジメント事業」、ビジネスインテリジェンス・プロフェッショナル支援のほか、25年4月に子会社化したアルネッツを含む「DX事業」に変更している。

■共創型創薬エコシステムを開始し、医薬品開発の成功確率向上へ

26年3月期も、企業のコンプライアンス意識の高まりを背景に、ビジネスインテリジェンス・コンプライアンス支援を含むリスクマネジメント事業が成長ドライバーとなる。すでに3メガバンクや複数の大手証券会社に導入されていることを武器に、利用企業の拡大や導入済み企業の継続や複数部署への追加展開にも努める。

加えて、**今後の急成長が見込まれるライフサイエンスAI事業には、経営資源を集中させ投資を継続していく。**特に同事業のAI創薬では、5月に開示したEAファーマと「Drug

業績動向 (6/11時点)

		売上高 (百万円)	前年比 (%)	営業利益 (百万円)	前年比 (%)	経常利益 (百万円)	前年比 (%)	純利益 (百万円)	前年比 (%)	EPS (円)
23年3月期	実績	7,375	2.2	▲185	—	▲168	—	▲2,843	—	▲72.3
25年3月期	実績	6,099	▲17.3	527	—	543	—	555	—	14.1
26年3月期	会社予想	7,000	14.8	700	32.7	715	31.5	615	10.8	15.6
	WA予想	7,000	14.8	700	32.7	715	31.5	615	10.8	15.6
27年3月期	WA予想	7,700	10.0	850	21.4	850	18.9	680	10.6	17.3



Discovery AI Factory (DDAIF)」を活用した共創プロジェクトや、中外製薬(4519)との共創プロジェクトが業績に貢献する見通し。また、熊本大学や東京科学大学とDDAIFを活用した共同研究を開始。**製薬会社と共創プロジェクトを進めているものの、各社とも社内リソースに限りがあり、プロジェクトがなかなか進まない懸念もあったが、FRONTEOが大学の協力のもとでDDAIFからの予測結果を実験で確認し、更にその結果をDDAIFにフィードバックすることで創薬開発の進行スピードの加速と成功確率の向上が期待される。**

FRONTEOが大学とともに得たデータを共創プロジェクトにそのまま流用するか、それとも有償で提供するかは今後の検討次第となるが、場合によっては新たな収益源となる可能性もある。

また、経済安全保障分野では、半導体や自動車などに使われる部品の調達先企業やその株主に特定の国や組織が入っていないか、製品開発に関与する研究者が特定の国などにつながっていないかなど、製品や人のつながりのリスクや情報漏洩のリスクを可視化する「KIBIT Seizu Analysis」がトランプ米政権による関税政策の上で効果を発揮できるため、需要が拡大する可能性もある。

ウエルスアドバイザーでは想定株価レンジをAI分野での上場企業の競合他社の時価総額、PSR（株価売上高倍

率)などを考慮した800-900円に据え置く。足元の株価と比較して上値余地は大きいことから、投資判断は「Overweight」を継続する。(宮川 子平)

■ 会社概要

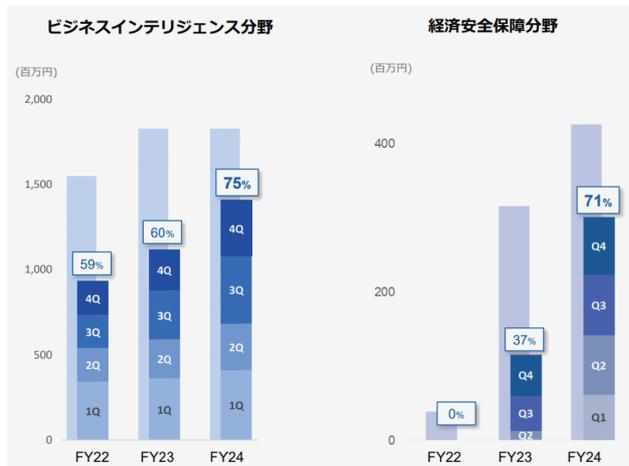
FRONTEOは、自社開発の特化型AI「KIBIT」の提供を通じて、日夜、社会課題と向き合う各分野の専門家の判断を支援し、イノベーションの起点を創造している。独自の自然言語処理技術(日米特許取得)は、汎用型AIとは異なり、教師データの量およびコンピューティングパワーに依存することなく、高速かつ高精度での解析を可能にする。加えて、解析した情報をマップ化(構造を可視化)する特許技術を活用することで、「KIBIT」が専門家のインサイトにダイレクトに働きかけることができ、近年、KIBITの技術が創薬の仮説生成や標的探索にも生かされている。

KIBITの独自技術およびアプローチを通じて、ライフサイエンスAI、リスクマネジメント(コンプライアンス支援分野、経済安全保障分野、リーガルテックAI分野)、DX(プロフェッショナル支援分野)で社会実装を推進している。

■ 事業環境と展望

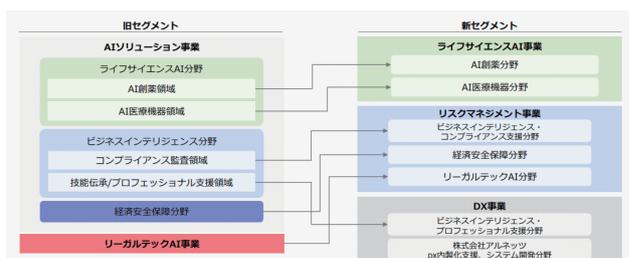
企業でのAI利活用が進んでおり、総務省の「令和6年版情報通信白書」によると、23年に6,858億円だった日本のAI市場は28年に2兆5,433億円まで拡大する見通し。自社開発の特化型AIエンジン「KIBIT」をライフサイエンスAI事業(AI創薬分野、AI医療機器分野)や、リスクマネジメント事業(ビジネスインテリジェンス・コンプライアンス支援分野、経済安全保障分野、リーガルテックAI分野)、DX事業(ビジネスインテリジェンス・プロフェッショナル支援分野など)に実装する動きが期待される。ライフサイエンスAI事業では、複数の製薬企業と共創プロジェクトへ向けた協議が進む。リスクマネジメント事業では、コンプライアンス意識の向上により、コンプライアンス支援が、地政学リスクの高まりにより経済安全保障分野が企業からの引き合いを強める。

リカーリング売上高は順調に伸びている



出所:会社資料を基にウエルスアドバイザー作成

ライフサイエンスAI事業、リスクマネジメント事業、DX事業の3セグメントに再編



出所:会社資料

リスク要因

同社はAIのビジネスへの実装において先行しているものの、生成AIの登場と浸透などを背景として急速な技術進化とサービス水準の向上が進んでいる。顧客のニーズも大きく変化してきており、変化への対応や技術革新への遅れが生じた場合、業績に大きな影響が出る可能性がある。また、同社の事業領域における第三者の知的財産権の完全な把握は困難であり、同社が認識せずに他社の知的財産権を侵害してしまう可能性もある。

株主還元 (6/11時点)

■ 配当の状況

		1株当たり配当金		
		中間期末	期末	年間
23年3月期	実績	0円	0円	0円
25年3月期	実績	0円	0円	0円
26年3月期	会社予想	0円	0円	0円

■ 株主優待

なし

競合他社比較 (赤太字は競合他社に比べ優位な数値) (6/11時点)

	FRONTEO (2158・東証グロース)	PKSHA Technology (3993・東証プライム)	エクサウィザーズ (4259・東証グロース)	
基本事項	株価	642円	3,570円	481円
	投資単位	100株	100株	100株
	最低投資金額	64,200円	357,000円	48,100円
	決算月	3月	9月	3月
株価指標	PER(予)	41.1倍	42.6倍	—
	PBR(実)	8.5倍	3.4倍	16.5倍
	配当利回り(予)	0.0%	0.0%	0.0%
成長性	売上高成長率(予)	14.8%	18.4%	20.3%
	営業利益成長率(予)	32.7%	—	4,247.8%
	EPS成長率(予)	10.8%	23.6%	—
収益性	売上高営業利益率(予)	10.0%	—	8.5%
	自己資本当期純利益率(実)	19.9%	6.8%	▲70.6%
	総資産経常利益率(実)	7.8%	8.3%	0.0%
財務安定性	自己資本比率(実)	45.9%	77.3%	34.3%
	デット・エクイティ・レシオ(実)	65.3%	11.5%	105.8%
	流動比率(実)	140.8%	385.7%	253.2%

比較企業は、主に自然言語処理、機械学習/深層学習技術に関わるアルゴリズムを研究開発し、AI関連サービスを展開するPKSHA Technology(3993)、AI関連プラットフォームを手掛けるエクサウィザーズ(4259)を選定した。

■成長性

26年3月期は、リスクマネジメント事業を主軸とした成長により売上高成長率はプラス14.8%、営業利益成長率はプラス32.7%、EPS成長率はプラス10.8%を予想。米国におけるリーガルテックAI事業撤退の影響は4月に子会社化を発表したアルネッツで補う。比較企業では、PKSHA Technology、エクサウィザーズともに売上高は2ケタ成長を予想している。PKSHAは営業利益予想を、エクサウィザーズはEPS予想を、それぞれ非開示としている。

■収益性

26年3月期の連結業績予想における営業利益率は10.0%となる。リスクマネジメント事業におけるリカーリング収益の増加や、不採算だった米国リーガルテックAI事業の撤退による損益分岐点の改善などで前期の8.6%から向上する見通し。25年3月期は営業利益以下が黒字に転換し、自己資本当期純利益率(ROE)は19.9%(前期は76.1%のマイナス)、総資産経常利益率(ROA)は7.8%(同2.0%のマイナス)と、どちらも前期から大幅に改善した。

■財務安定性

自己資本の増加と有利子負債の減少により、25年3月期の自己資本比率は45.9%(24年3月期は34.7%)、デット・エクイティ・レシオは65.3%(同108.9%)と、それぞれ改善。借入金の返済により現金及び預金が、米国におけるリーガルテックAI事業からの撤退で売掛金が、それぞれ減少した影響で流動資産が減ったが、借入金の減少等により流動負債も減少したため、流動比率は140.8%(前期は145.0%)ほぼ横ばいとなった。

ウエルスアドバイザー株式会社
データ分析部 アナリスト 宮川 子平
03-6229-0078 smiyagawa@wealthadvisor.co.jp

ウエルスアドバイザー・エクイティ・リサーチレポートの読み方

特徴

(1) 第三者機関として中立的な立場を重視

ウエルスアドバイザー・エクイティ・リサーチレポートは、ウエルスアドバイザーが位置する中立的な第三者としての立場を重要視し、客観的な比較・評価情報の提供に努めています。ウエルスアドバイザーがカバーする全銘柄に対し、アナリスト個人の見解に加え、複数のアナリストから成る銘柄評価委員会の意見を反映し、投資判断・想定株価レンジ・業績予想を決定しています。

(2) カバー銘柄のユニバース

カバー銘柄は下記対象銘柄から銘柄評価委員会が選出しています。

【銘柄選定基準】

- アナリストのカバー率が低い国内新興市場上場銘柄
- 個人投資家からの人気が高い銘柄（各オンライン証券のデータを参考）
- 時価総額を考慮（50億円程度以上を目安）
- 整理、監理銘柄や継続疑義、債務超過銘柄を除く

(3) 3段階の投資判断

カバー銘柄に対する投資判断は、ウエルスアドバイザーの各アナリストによる調査・取材・分析を基に銘柄評価委員会の協議を経て決定しています。下記の基準を基に3段階（最上位から「Overweight」（オーバーウエート）、「Neutral」（ニュートラル）、「Underweight」（アンダーウエート））で予測しています。

Overweight（オーバーウエート）

今後、半年間の株価推移が現値水準を15%以上上回ると予測される場合

Neutral（ニュートラル）

今後、半年間の株価推移が現値水準の-15%~+15%にとどまると予測される場合

Underweight（アンダーウエート）

今後、半年間の株価推移が現値水準を15%以下下回ると予測される場合

ウエルスアドバイザーでは業績見通しや財務状況、株価の値動きなどに関する見解の変更により、機動的に投資判断を変更します。ただし、影響力のある、新しい情報が明らかとなり、判断に時間を要する場合には投資判断を「Under Review」（保留）とする場合があります。また、取引時間中の投資判断の変更は行いません。アナリストが退職した場合などは投資判断をいったん「Suspension」（停止）とする可能性があります。

(4) 中期的な想定株価レンジ

向こう半年間で想定される株価のレンジを示します。株価指標などを用いた適正株価水準のほか、チャートのフシ目や直近の高値・安値、トレンドライン、移動平均線などテクニカル面や価格帯別出来高なども考慮して、中期的な上値メド、下値メドを決定しています。

項目説明

■ アナリストコメント

直近の業績動向や事業環境について、取材に基づいた評価をコメントしています。投資判断の根拠や業績予想に対する見方、今後の事業展望などを記載し、株式投資をするうえで最も重要な情報を掲載しています。また、読みやすさを考慮してテーマごとに2~4つのパラグラフにまとめているほか、重要なポイントを太字で強調しております。

■ 業績動向

通期決算の実績2期分と会社予想、およびウエルスアドバイザーの独自予想を今期、来期の2期分掲載しております。各銘柄への取材に加え、四半期毎での過去の業績傾向やセグメント毎での分析に基づいて業績数値を予測しています。

■ 会社概要

各銘柄がどのようなビジネスを展開しているのか、どこに収益源があるのかなどを詳しく解説するほか、今後どの事業に力を入れていくのか、中期的にはどのような事業展開を図っていくのかなどの中期的な見通しも取材を踏まえて掲載します。

■ 事業環境と展望

各銘柄が属する業界について、足元の状況や将来の成長性などの観点から解説します。競合他社への取材も実施することで業界全体を多方面から捉えるほか、業界団体のデータなど具体的な数値も掲載します。

■ リスク要因

各銘柄が有するリスクを解説します。事業面でのリスクに加え、業績面や財務面、株式市場独自のリスクなども考慮して様々な角度から見たリスクを示します。

■ 成長性

今期会社計画の売上高成長率、営業利益成長率、EPS成長率を競合他社と比較するほか、過去の経緯や主力事業の成長力などを評価します。

■ 収益性

今期会社計画の売上高営業利益率と前期実績の自己資本当期純利益率、総資産経常利益率を競合他社と比較するほか、過去からの収益性の変動などを評価します。

■ 財務安定性

前期実績の自己資本比率、デット・エクイティ・レシオ（＝有利子負債/自己資本×100）、流動比率（＝流動資産/流動負債×100）を競合他社と比較するほか、現預金やキャッシュフローなどの観点から財務安定性を評価します。